



「ビキニ事件」 とはなにか？

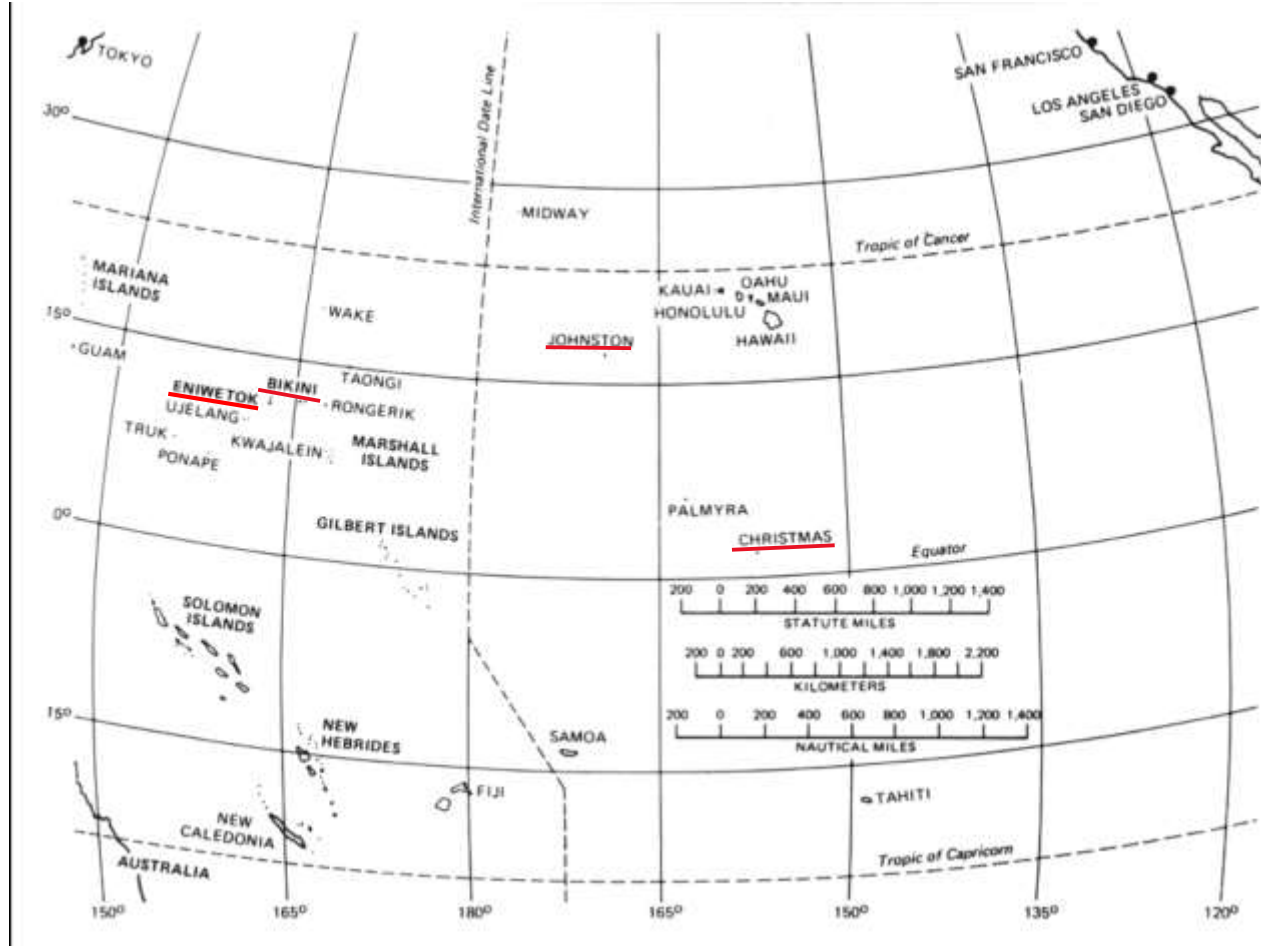
「第五福竜丸事件」を超えて

「第五福竜丸（だけの）事件」と思われている

- ほとんどの教科書に「1954年には第五福竜丸がアメリカの水爆実験による被害を受けた」というふうに書かれている。
- 例「日本国内では、1954年にアメリカの水素爆弾の実験で第五福竜丸が被ばくした事件をきっかけとして、原水爆禁止運動が全国に広がりました。」（東京書籍、中学校社会科用、2013年）
- 第五福竜丸展示館ホームページ抜粋
【『第五福竜丸事件』と『ビキニ事件』】ビキニ水爆実験により、第五福竜丸一隻だけでなく多くの船舶が被害を受けたことから、当協会では「ビキニ事件」という呼称を使っています。マーシャル諸島での核実験は1958年までつづけられており、被害を限定的に捉えることは適切ではないと考えています。

太平洋核実験場の位置

- ビキニ環礁
- エニウェトク環礁
- キリスマスイ島
- ジョンストン島
- 出典：
Wikipedia/English/Pacific Proving Grounds



そもそもなぜビキニ環礁が選ばれたのか？



- ドイツは1880年代以降、ビスマルク諸島、カロリン・マリアナ・マーシャル・パラオの各諸島を獲得していた。
- 第一次世界大戦の結果、日本はヴェルサイユ条約によって、赤道より北にある旧ドイツ領南洋諸島の委任統治権を得た。
- このためマーシャル諸島は日米の地上戦に巻き込まれ、戦争被害も受けている。
- 日本の敗戦により、米国の支配下に置かれた。(1947年国連信託統治領となるも実態は米支配)

青＝ビスマルク諸島 緑＝カロリン諸島 ピンク＝マリアナ諸島 オレンジ＝マーシャル諸島 茶色＝パラオ諸島

アメリカの核実験場の主な選定条件

(1947年公式記録)

大前提：ニューメキシコの経験から、米国の300～500マイル圏内では核実験は行わない。米本土の全域、バミューダ及びカリブの全海域が条件から外れた。

- 実験場は無人か無人に近いところ（住民は皆避難させなくてはならない）
- 一番近い都市から少なくとも300マイル（約480キロ）離れた場所
- 縦横に勢い拡散する水の流れが予測できること（人びとや漁業に危害が及ばないように水中に放出された放射性物質は分散させなくてはならない）
- 米国の管理下にあること

出典「視えない核被害——マーシャル諸島米核実験被害の実態を踏まえて」竹峰誠一郎P68-71

実態は強制移住

- 1946年2月10日、マーシャル諸島軍政長官がビキニ環礁を訪れ、核実験場建設に伴う移住を住民に要請。「人類の幸福と世界の戦争を終わらせるため」と説明。
- 同年3月6日、ビキニ住民強制移住。米本土から海軍の写真家やニュース映画の取材陣がビキニに押し寄せ、島民が喜んで出ていくかのように演出するため、何度も撮り直した。
- 同年7月1日、クロスロード作戦第1回エイブル、7月25日第2回ベーカー（各21キロトン級）

参考「見えない核被害——マーシャル諸島米核実験被害の実態を踏まえて」竹峰誠一郎P71-73

太平洋核実験場でアメリカが行った核実験

爆発回数 合計105回（マーシャル諸島67回）

年	計画名	爆発回数	総出力	場所
1946年	クロスロード作戦	2	46 kt	ビキニ環礁
1948年	サンドストーン作戦	3	104 kt	エニウェトク環礁
1951年	グリーンハウス作戦	4	398.5 kt	エニウェトク環礁
1952年	アイビー作戦	2	10.9 Mt	エニウェトク環礁
1954年	キャッスル作戦	6	48.2 Mt	ビキニ環礁
1956年	レッドウィング作戦	17	20.82 Mt	ビキニ環礁、エニウェトク環礁
1958年	ハードタックI作戦	35	35.6 Mt	ビキニ環礁、エニウェトク環礁
1962-63年	ドミニク作戦	36	38.1 Mt	キリスィマスィ島 、 ジョンストン島 、中部太平洋 ^[2]

キャッスル作戦第1回

ブラボーの規模

核爆発エネルギーの大きさとキノコ雲の高さの相関図

①=民間航空機の飛行高度

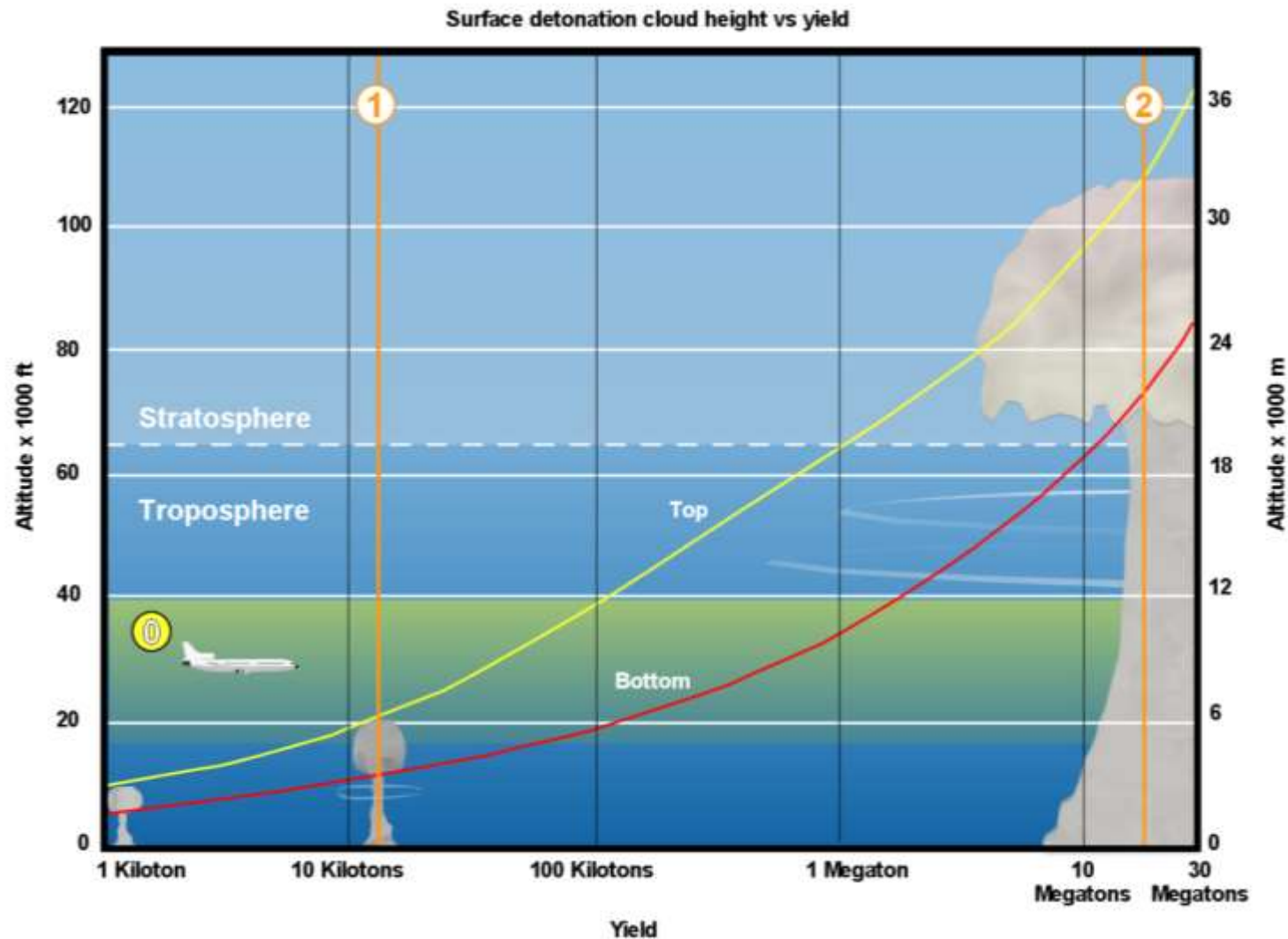
②=Fat Man 長崎原爆

③=キャッスル作戦ブラボー

Troposphere=対流圏

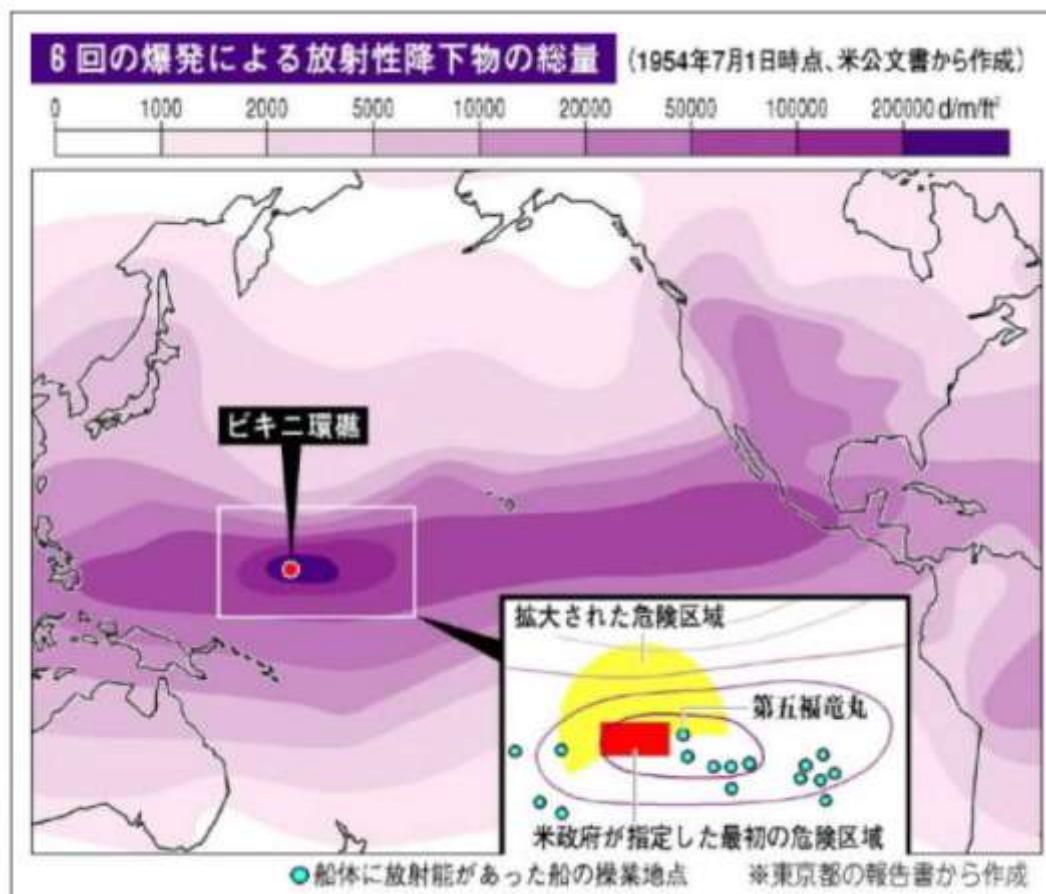
Stratosphere=成層圏

出典：Wikipedia/English/Effects of nuclear explosions



「キャッスル作戦放射性降下物」米公文書

アメリカ自身がビキニ水爆実験の被災国だった



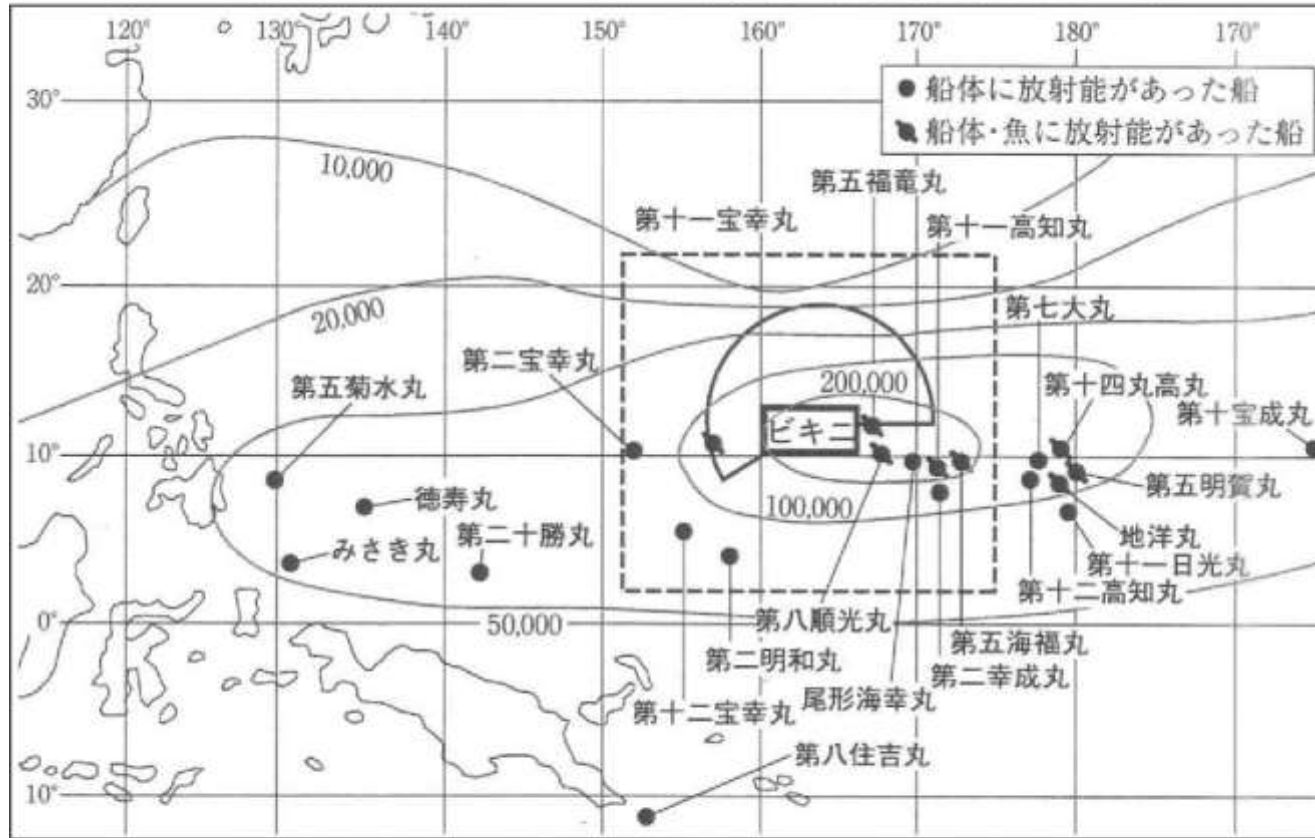
「キャッスル作戦」放射能降灰図

- 1955年5月に米気象局を中心にまとめられた報告書、全227ページ。アメリカが1984年に機密解除し、2010年、米エネルギー省ホームページで全文が見つかった。
- ビキニ環礁から東西に長い楕円状に降灰が広がり、日本や米国、アフリカ大陸など世界中に降灰があったことが示され、その総量は22.73メガキュリーと算出されていた。
- 「熱帯地方以外ではアメリカの南西部が日本の約5倍、死の灰を受けている」という記述もある。さらに、いつ核実験すればアメリカにとって都合がよいのかが書かれている。

参考：『核の海の証言』P120-P134

日本だけでのべ1000隻の被災漁船

1954年3月16日から5月31日までに東京湾で放射能が検出された船



10,000~200,000曲線は、米公文書「キャッスル作戦」放射性降下物総量（単位はd/m/ft²）

□ 最初の危険区域 ⊖ 拡大された危険区域 [] 水産庁要報告指定水域

*東京都獣衛生課「魚類の人工放射能検査報告」をもとに作成

- アメリカの予想以上に汚染海域が広がり、3月19日に危険区域が8倍に拡大されたが、そのことを知らずに操業していた船も多かった。
- 第五福竜丸含む5隻が3~5シーベルト/時、相当の場所にいた。
- 操業中止や忠告がされず、1958年まで多数の船が何度も被災した。
- 高知県のほとんどの船が一隻につき2回以上、多いもので6回も汚染マグロを廃棄している。

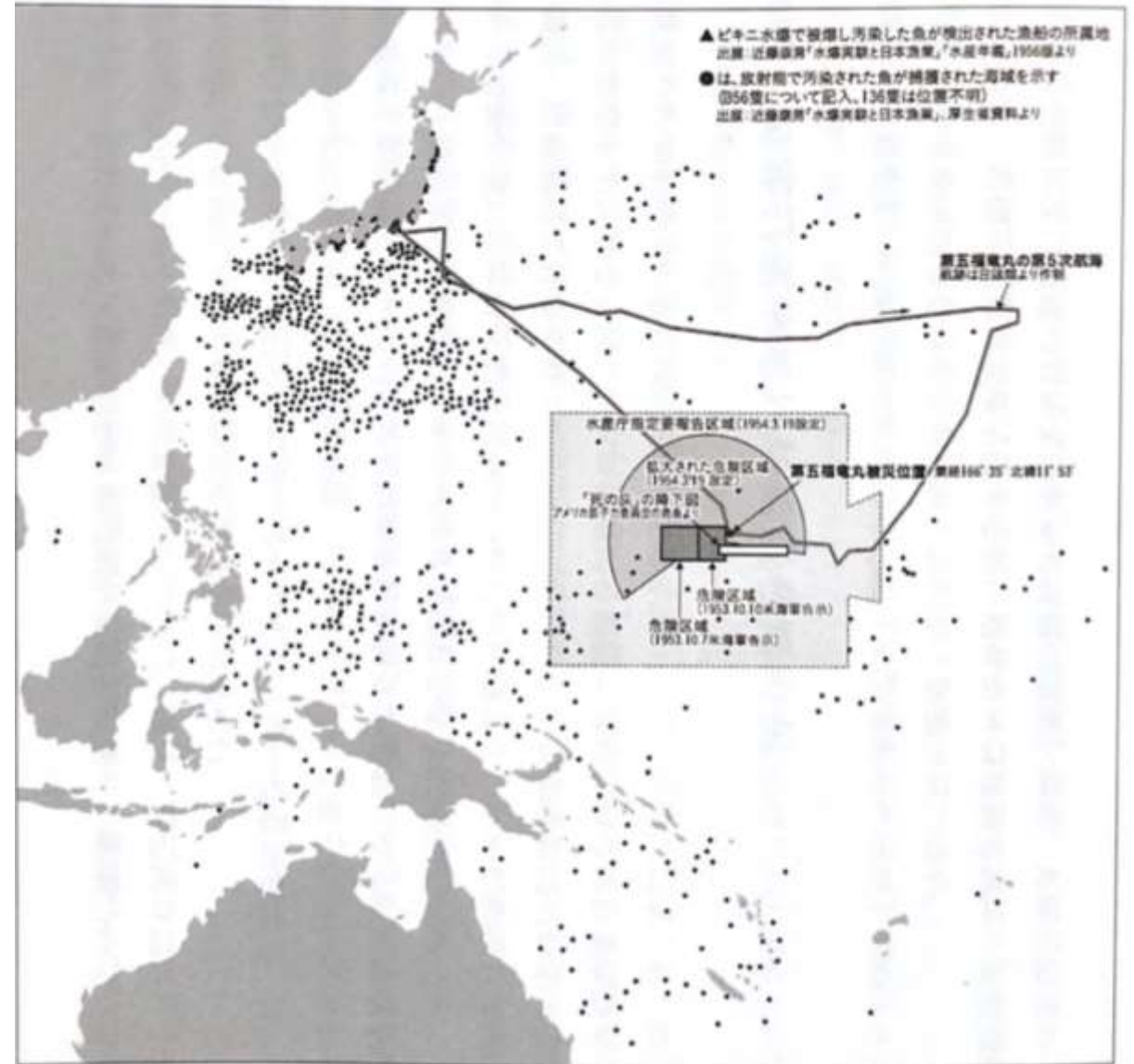
出典：『核の海の証言』地図P123

「第五福竜丸事件」

3月1日ブラボー実験により被ばく。
すぐに原爆と判断。3時間後に白い死の灰が降ってきた。全員警戒態勢に入り、逃げるため真北に向かった。

地図：

- ▲ = ビキニ水爆で被爆し汚染した魚が検出された漁船の所属地
- = 放射能で汚染された魚が捕獲された海域
- = 米政府が発表した最初の危険区域
- ◒ = 後から拡大された危険区域
- = 第五福竜丸が被災した場所



資料/第五福竜丸館提供 出典：『ビキニ核被災ノート』

第五福竜丸事件 2

- その日の夕方から頭痛、吐き気、目の痛み、充血。全速力で日本を目指す。八丈島を過ぎた頃から健康が悪化、顔色悪くなり、肌が出ていたところに火傷の火ぶくれ、目の充血、食欲不振、頭痛。「死の灰」を証拠に持ち帰った。
- 3月14日焼津に帰港 海上保安庁に報告、焼津の病院で診察入院後、東京の大学に移る。
- 中央甲板約25ミリレントゲン、船室天井約100ミリレントゲン
- 3月16日 読売新聞がスクープ
- マグロはすでに東京をはじめ14都府県に出荷されていた。発見された汚染マグロは穴に捨てられた。
- 漁労長が冷静で判断力があり、すぐに真北に向かうなど危機意識が高いところが他の漁船と違った。
- 久保山愛吉さんの手記「実験ですらこの始末、これを実戦に使用した場合は想像しただけでもぞっとするではありませんか。人類の破滅はおろか、生物無き地球と化してしまうことすら考えられます。
(中略) 幸いにも生き残ったところで放射線により真綿で首をしめられたように、徐々にまいてしまうことは明らかです」

参考：『核の海の証言』 P92-117

第五福竜丸事件と並行して進む核実験 & 被災

- 3月18日 水産庁、マグロの水揚げを5港に指定し検査指示
- 3月19日 米、ビキニ立ち入り禁止区域を8倍に広げる
- 3月20日 第五海福丸へ、無線により漁場に原子病あり、水揚げ禁止の報がある。
- 3月25日 岡崎外相、水爆実験協力は当然と国会で答弁
- 3月27日 **キャッスル作戦2回目ロメオ** 第五海福丸当直が火柱目撃
- 4月7日 **キャッスル作戦3回目クーン** 第五海福丸浦賀に帰港し東京築地に回港
- 4月10日 第五海福丸が沖合で魚を廃棄。水産庁、厚生省の調査員も乗船。
- 4月26日 **キャッスル作戦4回目ユニオン**
- 4月27日 第五明賀丸1276貫、第五明神丸1200貫、第七明神丸2000貫の汚染マグロを廃棄
- 5月5日 **キャッスル作戦5回目ヤンキー**
- 5月9日 東京杉並協議会、水爆禁止署名運動を開始
- 5月10日 第七清寿丸 船員Yさん パラオの病院で急死（19歳）
- 5月14日 **キャッスル作戦6回目ネクター**
- 5月15日 第一次俊鶉丸調査、ビキニ海域へ放射能調査へ出港 調査員30名 記者9名乗船
- 5月16日 日本各地で放射能雨

- 5月19日 東京築地入港の第八順光丸の船体から2万8000カウント。第五福竜丸以外では最高値。漁船員からも被曝の症状が出るが、検査官から適切な指示をうけず、誰も病院で診察を受けていない。
- 8月8日 原水爆禁止署名運動全国協議会結成
- 9月23日 第五福竜丸無線長、久保山愛吉さん死亡、40歳
- 11月 被災漁船数162隻で最多
- 11月15日 「放射性物質の影響と利用に関する日米会議」 原発導入のための日米協力体制のもとで開催(～19日)
- 12月 被災漁船数114隻 魚の汚染度下がらず、5000カウント以上が約40%。
- 12月10日 汚染マグロの検査値を大幅緩和（水産業界が廃棄基準100カウントの引き上げを要求していた）
- 12月18日 第三清寿丸東京に入港 船体から1万6000カウント、マグロから2000カウント
- 12月28日 厚生省が12月31日かぎりでもマグロの放射能検査と廃棄を中止した（閣議決定）
汚染マグロは検査なしで流通し、漁船員、また汚染マグロを食べる消費者も被ばくを重ねる。
- 1955年1月 日米交換文書 アメリカが慰謝料（補償金ではない）200万ドル（7億2000万円）を払い政治決着。第五福竜丸以外の被害実態はその後調査されなかった。

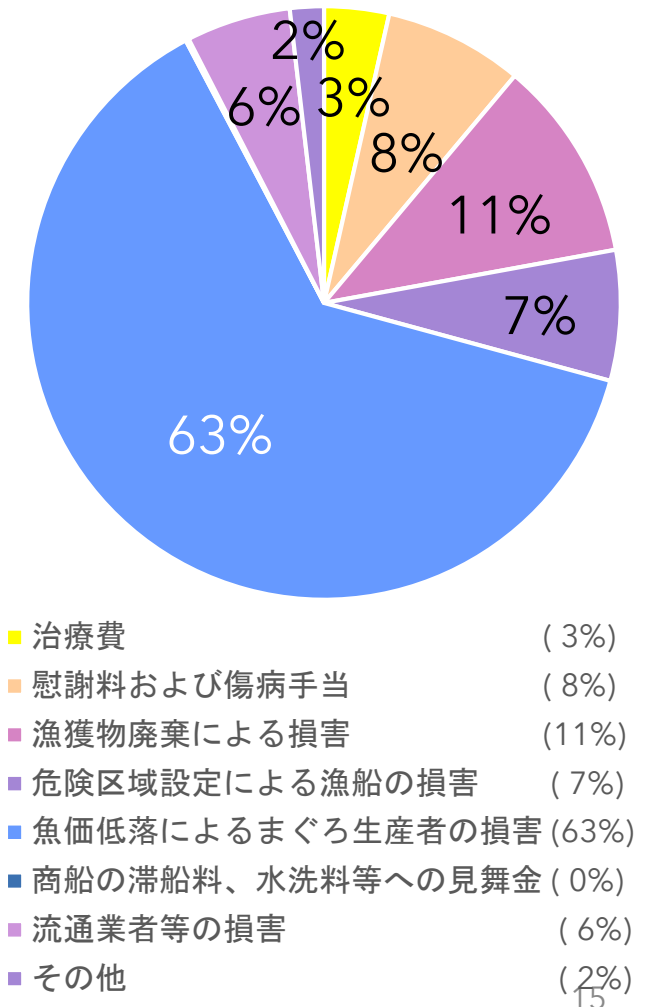
第五福竜丸だけが慰謝料をもらった？

慰謝料総額7億2000万円 のゆくえ

- 閣議決定された慰謝金配分表を見ると、第五福竜丸乗組員がもらった治療費は24,869,000円、その他が605,000円。慰謝料および傷病手当金は、亡くなった久保山さんが550万円、福竜丸22人は合計4400万円（1人平均200万円）、その他は147万円。
- 治療費の合計は**25,474,000円（3.5%）**、慰謝料および傷病手当金合計は**54,262,000（7.5%）**全体から見ればたった11%だが、この金額の98パーセント近くを第五福竜丸に当てたため、ねたみと羨望の的になった。
- 慰謝料が最も多く払われたのは「魚価低落によるまぐろ生産者の損害」454,204,000（63%）
- ビキニ水爆被災漁船の所属地別慰謝料配分額上位
 - 1位 神奈川 172,915,000円 84隻（汚染マグロを廃棄した被災船隻数）
 - 2位 静岡 91,704,900円 36隻
 - 3位 高知 87,733,500円 117隻

参考『核の海の証言』P175-176、P182-183

慰謝金配分



第五海福丸 第五福竜丸の跡を追うようにビキニ環礁海域で操業

- 3/13～26日ビキニ海域で操業 4/7東京入港
- 明け方ブリッジにいた当直の証言「海に火柱が一本立ち、海面が赤くなり（夜なのに）水平線がきれいに見えた」（3月27日の実験）
- 実験があったことを無線で知り、危ないと判断して2日ほど南に下がった。一時避難したが操業は続行
- 船の中ではマグロをさかんに食べた。刺身で内臓も食べた。
- 普段は海水風呂、雨が降ると裸で飛び出し、テントにも水を溜め、洗濯や洗いものに使った。
- 操業直後、全身に痛み。急に寒くなったり思考力、記憶力がなくなった。肩がしびれるように痛い、目まい。
- 放射能検査 手袋1200カウント、シャツ700カウント、マグロの内臓200カウント。厚生省が来て水揚げ禁止
- 4/9浦賀に回港。アメリカ側が検査に来て魚を調べ、結果はよい、食べてもさしつかえないと言う。
- 4/10水産庁と厚生省の検査員が乗船し、沖へ魚を捨てに行く。検査員が船酔いし、規定の180カイリに達しない100カイリで魚を逃して帰港。大量にマグロを廃棄（340本、3725貫）

第八順光丸

4月15日から5月4日までビキニ危険区域近くで操業

- 高知、岩手、宮崎、茨城、千葉、神奈川、和歌山、三重、兵庫、徳島、鹿児島出身の漁船員を乗せた大きな船。
- 双眼鏡でビキニ島を見ていた乗組員が「おい、島が赤茶色になって、木が一本もないぞ」と叫んだ。
- 第五福竜丸以外では最高値／船体2万カウント、マスト・煙突3万カウント、通風筒5000カウント
- 船員Kさん 20歳で召集。ニューギニア、ビルマ戦線、生還から4年後漁船員に。船は水洗いしたが船員は診察を受けなかった。頭から250カウント出たが頭を何度も洗えと言われただけ。かゆみ、脱毛、めまい、倦怠感、その後、胃潰瘍、神経痛、脳軟化症。2001年病死。
- 船員Tさん 千葉県出身の漁船員 急性骨髄性白血病（1956年3月死亡）。操業時、近くの船に急病人が出て、ペニシリンを届けるため海に飛び込み泳いだ。日本医科大に入院。医者は「心配しなくても大丈夫」の一点張りで病名さえ教えなかったが、亡くなった時には急に低姿勢になり「解剖させて下さい」としつこく言ってきた。
- 日本医科大の学長（当時）塩田広重氏は、昭和29年10月に発足した『原爆被害対策に関する調査研究連絡協議会』の会長。

第二幸成丸 操業中3/27、帰路4/7、2回の核実験の死の灰をかぶる

- 東京築地で検査されたのは船体とマグロだけ。乗組員は検査をうけなかった。
- 船体から4212カウント、頭髮から1500カウント。不合格のマグロは大島沖に投棄。
- 毎日ススの塊のような「黒い雪」がサラサラ降った。デッキに1センチも積もることもあった。
- 腕についたのを擦るとシミのようになった。風呂に入れなかったので洗い流すこともできなかった。
- アメリカの飛行機が飛んできて、船の上空を低空で3回旋回して去った。機体から身を乗り出して写真を撮っていたが、水爆実験による参考資料目的の撮影だった。
- 頭や顔、米や野菜も海水で洗った。水は飲食のみ。
- 水産庁の指定した要報告区域（出漁中のマグロ船に報告を求めた区域）については帰港まで全く知らなかった。
- 2年後ごろから突発的に病気になったり急死する船員が増えた。

参考『核の海の証言』

俊鷗丸の調査

第一次俊鷗丸調査 厚生省と水産庁が派遣 調査員30名（各分野の代表者） 記者9名乗船（読売新聞記者も）

- 1954年5月15日～7月7日。51日間にわたり魚類、プランクトン、海水、大気の調査、気流、海流の測定など。
- ウェーク島を出て2日目、海水1リットルあたり150カウント、プランクトン生重量1グラムあたり数千から1万カウント検出。南下するに従い汚染がひどくなった。ビキニ環礁から1000キロ東に離れ、海流が西に流れている海域でも汚染されていた。
- 爆心地通過の間、10分おきに調査。シンチレーション1032カウントまで上がった。
- ビキニ環礁付近から流れ出した放射能は、深さ100メートル、幅数十から数百キロのベルト状になって、大部分が西へと流れていた。
- この調査は水爆実験による被災を裏づけ、アメリカ側に水産業界の補償要求に応じる責任があることを立証した。

第二次俊鷗丸調査 1956年5月26日～6月30日

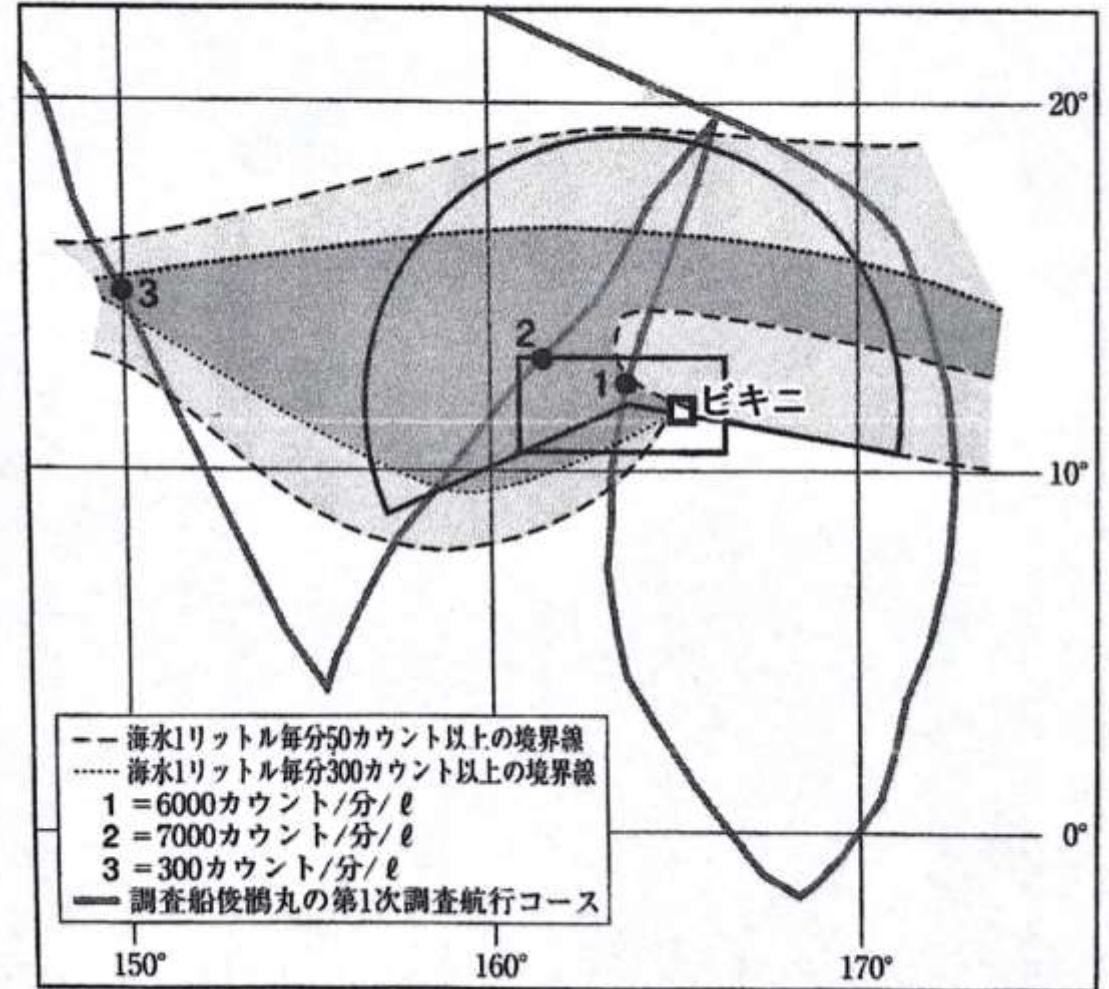
- アメリカの高空爆発実験「レッド・ウィング作戦」（17回）の実施中
- 調査期間中7回の核実験があった。海水の汚染は低レベル高範囲、大気中から高い値（最高値は第一次調査の212倍）の放射能検知。
- 調査団は、帰港後も次の調査を実施する意欲を見せていたが、政府は調査を中止してしまった。

参考『核の海の証言』

若い船員の急死

- Tさん：室戸岬水産高校3年 1954年5月中旬 操業実習で八丈島東方にいるとき放射能雨を浴びた。鼻血、再生不良性貧血、肛門周囲炎、発声不能、高熱、全身の痛み、同年12月6日、20歳で急死。
- Yさん：第七清寿丸 とても元気でよく海水を浴びていた。4月28日発病。パラオに緊急入院。1954年5月10日、19歳で急死。無線で「死体は持ち帰らず水葬にするように」と言われ水葬された。

ビキニ海域の表面海水の汚染状況



※「蒼」 No.5 をもとに作成

俊鵠丸第一次調査航行コース
参考『核の海の証言』地図P86より

沖縄

当時はアメリカ占領下、水爆実験のことはあまり知らされていなかった

- マグロ漁船、銀嶺丸と大鵬丸（年8回被災海域で操業）
1954年、那覇港でアメリカ軍の放射能検査を受けたが結果は知らされず、魚の廃棄命令もなかった。二つの船の確認された乗組員68人のうち、17人が40代半ばから50歳代で死亡（うちガンは11人）水爆実験との関係を知らず、健康管理も不十分。
- 汚染海域近くで『貝取り船』10数隻が漁をしていた。
- 当時、沖縄では80パーセントの人が雨水を飲み水にしていたため、放射能雨を飲んだ疑いあり。那覇では米軍が雨水を調査。容器に雨水を入れ、ガイガー管を近づけて検査し「有害な放射能はない。絶対安全である」と報道した。
- 正規に嘉手納基地で測定した雨水の放射能値は12,833D/M/FT²（=約214Bq）

参考：『核の海の証言』、冊子『「ビキニ事件」最新資料 ビキニ「死の灰」世界各地へ』

太平洋の島々 マーシャル諸島、グアム、サイパン

- 被ばくしたマーシャル人は二百数十人。最も酷かったロンゲラップ島は爆心地から180km ※第五福竜丸は160km
- 1980年ブルックヘブン米国立研究所の報告書：ロンゲラップの大人の住民は1900ミリシーベルトの外部被曝に加え、男性は1万ミリシーベルト、女性は1万1000ミリシーベルト相当の内部被曝を甲状腺に受けたと推定。子供はさらにその数倍。

【マーシャル諸島の人々の証言】

- 現地時間朝6時45分。爆風、爆発音、光（オレンジ、緑、青、赤）戦争が始まったのではと思った。
- 白いものが落ちてきて水に入ると黄色に変わった。すべて苦い味。体の痒み、熱、下痢、頭痛、吐き気、髪が抜けた。
- 元ロンゲラップ村長ジョアン・アンジャインさん：1946年から、核実験のたびにアメリカの船でラエ島に避難させられ、毎回3ヶ月ぐらいそこにいた。その間、米軍はロンゲラップで調査をしていた。ところが、1954年の「キャッスル作戦」の時は、1週間ほど前にアメリカの軍人が一人で島に来て「一週間後に大きな爆弾のテストをする。お前たちの命はこれだけだ」と、人差し指の半分ほどを示した。どうして今度は他の島に避難させてくれないのかと聞くと、「アメリカ政府からの命令がないのでできない」と答えただけで、そのまま帰って行った。

↑ 史上最大規模といわれる「ブラボー」実験の時に限って島民を放置したのは不自然。アメリカ政府は故意にロンゲラップ島民82名を島に放置し、人体実験を行った可能性がある。 参考『核の海の証言』

モルモットにされたロンゲラップの人々

- 被ばくした島民はクエゼリンの米軍基地に隔離され、3ヶ月の間「治療」と称するさまざまな検査を受けた。シャワーや海水で体を洗われる、毎日3回海で泳がされる、尿を4リットルぐらい採られる。
- 被ばく後の追跡調査のため、顔写真つきの被ばく者カードを島民全員に持たせ、マジェロ環礁エジット島で定期的な検査を受けさせ医学的、軍事的資料集にまとめた。AEC(米原子力委員会)「コナード報告」
- 1957年、ロンゲラップ島に帰島の許可が出た。戻ると残留放射能によりさらなる被ばく。エビを食べて吐く、何か食べると口が腫れる、裸足で歩くと足がしびれる。この頃から流産、死産、異常児の出産が続いた。
- 「コナード報告」1958年報：「ロンゲラップ島の放射能汚染は、人間の居住には安全だとしても、その水準は地球上の人の住むいかなる地域よりも高い。島民たちがこの島に住むことにより、放射能が人体に及ぼす非常に貴重な生態学的データが得られるであろう」
- ロンゲラップの被ばく者の病気：甲状腺障害、大腸・肝臓・腎臓・胃腸などの内臓障害、四肢のマヒ、白内障、白血病、肉腫瘍、ガン。甲状腺摘出によりアメリカからの医薬品に頼る生活。

参考『核の海の証言』

韓国

- 1958年アメリカの援助を受けて遠洋マグロ漁業が始まった。おもな目的はサモア諸島にあるアメリカのバン・キャンプ社（缶詰工場）へのマグロの提供
- 1958年はアメリカが「ハード・タック作戦」（35回）を行った、もっとも核実験が集中した年。ビキニ事件で日本のマグロ漁船がサモア船団から離れ、マグロの水揚げが減少したためその穴埋めに。
- 被ばくした日本の中・小型船が韓国へ輸出されたという話もある

参考『核の海の証言』

ほかにも・・・

【日本】

- 1954年5月16日～28日にかけ、降雨 1 リットル当たり、京都86,000カウント、静岡19,500 カウント、東京10,000カウントと報道され大問題となった。
- マグロ漁船だけでなく、危険海域を往復する貨物船・捕鯨船・客船も被ばくした。

【台湾、フィリピンのマグロ漁船】

死の灰はフィリピン沖にまで降った

【アメリカ兵士】

ほとんど無防備で核実験に参加させられ死の灰を浴びた

太平洋核実験の実相は、核兵器使用による世界的影響を明らかにし、核兵器廃絶が国際的に広がるための重要な資料となる（『核の海の証言』 P135）

まとめ

- ビキニ事件は政治決着（慰謝料）により終わった事件にされてしまった。その後も太平洋上で核実験が続いたにもかかわらず、国は放射能検査の再開もせず、漁船への警告もせず、何の対策もとらなかった。被災者は放置され、忘れられていった。
- 福島原発事故も同じように、政府による報道規制、マスコミによる事故の矮小化が続き、事故は終わったことのように、そして放射能汚染はたいしたことがないかのように扱われてしまっている。
- 私たちはこのことから目を逸らさず、むしろ埋もれていた核の歴史を掘り起こし、「自分も被ばく者」との自覚を持って、核を脱する道を探していかなければならない。

参考文献

- 『核の海の証言——ビキニ事件は終わらない』 山下正寿著 新日本出版社2012.9.25
- 「視えない核被害——マーシャル諸島米核実験被害の実態を踏まえて」 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻 竹峰誠一郎 2011年度博士学位申請論文
- 「ビキニ事件」最新資料『ビキニ「死の灰」世界各地へ』編集・高知県太平洋核実験被災支援センター
- 『ビキニ核被災ノート——隠された60年の真実を追う』 「ビキニ被災ノート」編集委員会 [編] 2017.3.1発行

2020年2月1日ハカルワカル広場お茶会資料「ビキニ事件とはなにか？」